

氏名	鎌 田 一 郎
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第3861号
学位授与の日付	平成15年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Attempt to Establish an Experimental Animal Model of Moyamoya Disease Using Immuno-embolic Material -Histological Changes of the Arterial Wall Resulting from Immunological Reaction in Cats- (免疫塞栓物質を用いたモヤモヤ病動物モデル作成の試み-猫における免疫学的反応から得られた動脈壁の組織変化の検討-)
論文審査委員	教授 黒田 重利 教授 大江 透 教授 阿部 康二

#### 学位論文内容の要旨

本研究では、モヤモヤ病における内頸動脈終末部に顕著に認められる内膜肥厚と免疫学的反応の関係および内頸動脈閉塞と脳底部のモヤモヤ血管の発達の関係について検討した。乳酸・グリコール酸重合体(LGA-50)と N-アセチルムラミル-L-アラニル-D-イソグルタミン(MurNAc-L-Ala-D-isoGln: MDP)を用いて桿状の免疫塞栓物質を作成し、猫の一侧総頸動脈より血管内へ注入した。この桿状免疫塞栓物質を投与されたグループでは、組織学的に内頸動脈終末部の内弾性板の重層化が認められた。しかし、血管撮影では、内頸動脈の狭窄性変化は見られなかった。以上のことより、MDPによる免疫反応が、モヤモヤ病の血管変化に類似した組織変化を猫の内頸動脈に引き起こしたと考えられた。しかし、血管閉塞を組み合わせた今回の実験では、基底核周辺にみられるモヤモヤ血管の形成については、明らかにすることが出来なかった。

#### 論文審査結果の要旨

モヤモヤ病の成因は不明である。本研究は、内頸動脈終末部に著明に認められる内膜肥厚と免疫学的反応に注目して動物実験を行い、形態学的に検討したものである。乳酸・グリコール酸重合体(LGA-50)とMDPを用いて免疫塞栓物質を作り、猫の総頸動脈へ注入した。投与された群では、内頸動脈終末部の内膜の屈曲および内弾性板の重層化があった。この変化はモヤモヤ病の血管内膜変化に類似している。これはモヤモヤ病の成因について、免疫反応の関与があるという重要な知見を得た価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。